

現代短歌の中の地球科学

～地質構造編～

荒磯の柱状節理の岩肌につぶかってくる
波のこどもら

小林幸子「千年紀」

柱状節理は、かなり有名で広く知られた地質現象の一つでしょう。この歌の舞台は伊豆半島の爪木崎と聞いています。柱状節理というのは、2方向以上の鉛直な節理（地質学的成因による岩石・岩盤中の明瞭かつ平滑な割れ目）面が発達して柱状の岩塊を形成している構造をいいます。玄武岩などの熔岩にしばしば見られますが、岩体の冷却時の体積収縮によって形成されたと考えられています。柱状節理の間隔（つまり柱の太さ）は冷却速度に比例し、ゆっくり冷えれば大きくなると考えられています。

褶曲のおそろしき熱にうかされて縞を生じたる
瑪瑙の心

井辻朱美「吟遊詩人」

褶曲作用をうまく言い表していると思います。地質標本館に宮城県で見られる褶曲構造のレプリカがありますが、大地がまるで鉛細工のように曲がることに改めて驚かされます。ただし、瑪瑙は石英の微小結晶が網目状に集まったもので不純物の量と種類によって色、透明度の異なる縞模様を生じますから、褶曲作用の熱にうかされた地層に生じる縞模様とは本質的に違うものです。しかし、あたかも鉛細工のように見える瑪瑙の縞模様から褶曲を連想した作者の感性は面白いと思います。

活断層越えて市内に戻りたり平坦地一面に灯の
ともりをり

真中朋久「雨裂」

活断層を広辞苑でひいてみると、「過去百万年間にずれたことのある断層（岩石や地層が破壊されて

生じる不連続面）。将来もずれる可能性があり活動中と見なされる。地形にずれが残っているなど近い過去に活動した痕跡が存在する。」とありました。ところで、私が習ったところでは、活断層は「きわめて近い時代まで活動していた断層」ということで通常第四紀層をきっているもの、という認識だそうですね。百万年という限定はどこから来たのでしょうか。国語辞典で調べるのが間違っているよ、と言われるのかも知れませんが、一般の人はたぶん国語辞典で調べるのだと思うのです。国語辞典が版を重ねるとき、専門用語の新しい考え方に対応するようにチェックする機能が不十分なのかも知れません。

この歌は、京都周辺の活断層を指しているそうです。べつにどこの断層を想定しても短歌の鑑賞に影響はありません。いずれにせよ、作者は自分の住む街が活断層の近くにあることを知っていて、今は何事もなく静かな夜を迎えていることにつかの間の安堵感を覚えているのでしょう。住む以上は土地の履歴を知っておきたい気もします。

佳き景観の家を羨しめば活断層が近くを通ると
友は憂えぬ

中井順二（遺稿集より）

次は活断層が近くを通ることを知りつつ住んでいる友を歌ったものです。日本で暮らす以上、地震から逃れることは難しいかもしれません。これは歌集からの引用ではありません。作者の中井氏は地質調査所地殻物理部長でした。定年退職後故郷の三重へ帰って短歌を作り始めましたが、まもなく病気のために亡くなりました。もう少し長生きをしたら、地球科学用語を駆使した短歌が多く見られたかもしれないと思うと残念です。

作者紹介

小林幸子：昭和20年奈良県生まれ。
井辻朱美：昭和30年東京都生まれ。
真中朋久：昭和39年茨城県生まれ。

森尻理恵（産総研 地球科学情報研究部門 地球物理情報研究グループ）